21世紀の測地学の動向

— ヨーロッパ地球物理学協会第27回総会（ニース、2002年4月）に出席して —

竹本 修三

国 ▶ 際 ▶ 派 ▶ 遣 ▶ 報 ▶ 告

EGS総会とIUGG総会

2002年4月21日から26日まで、ニース（フランス）のコンgres・センター（アクロポリス）において、ヨーロッパ地球物理学協会（EGS）第27回総会が開催された。このEGS総会の期間中に、総会会場に近いホテルの会議室で国際測地学協会（IAG）の執行委員会が開催された。筆者はIAG第V委員会（地球潮汐委員会）のPresidentおよびIAG第V分科のSecretaryとして、このIAG執行委員会への出席を要請されていたが、幸いにして日本学術会議から派遣されて、EGS第27回総会とIAG執行委員会に出席することができた。

EGS総会にはヨーロッパ以外の地域からの参加者も多い。主催者発表によれば、第27回総会の参加者は、75の国と地域から計5110名であっ

た。このうち、日本からの参加者は69名である。2001年の第26回総会は、59の国と地域から計4908名が参加し、日本からの参加者は66名であった。

この参加者数は、2003年6月30日～7月11日に札幌市で開催が予定されている国際測地学および地球物理学連合（IUGG）第23回総会に匹敵する規模である。国外2500名、国内2500名の参加者を予定しているIUGG札幌総会は、アジアで開かれる初めてのIUGG総会として、関係者の期待も大きく、日本学術会議の共同主催も決定し、組織委員会を中心として、受け入れ準備が急ピッチで進められている。

ところで、次回のEGS総会は、米国地球物理学連合（AGU）と合同で、2003年4月にニースで開催されることがすでに決定されていたが、その後、ヨーロッパ地球科学連合（EGU）もこれ

に加わるようになった。EGSだけでも5000名が集まるのに、EGS-AGU-EGUの合同大会となると、どのくらいの参加者数になるのか予想も難しいが、いずれにせよ、同じ年に開催されるIUGG札幌総会への影響は免れない。なるべく海外から多数の有望な若手研究者を招聘するために、IUGG札幌総会・組織委員会では、その基金確保へ向けての懸命な努力を続けているが、時節柄、寄附集めに四苦八苦している。

測地学の動向

21世紀の測地学は、測地目的の人工衛星データを用いた研究が大きなウェイトを占めることは間違いない。折りしも、2001年から2002年にかけて、CHAMP (CHALLENGING Mini-satellite Payload) や GRACE (Gravity Recovery And Climate Experiment) などの衛星重力ミッションがスタートし、高精度の地球重力場測定が可能になりつつある。

これらのデータに基づいて、固体地球と流体部分の相互作用に関する研究、すなわち、地球重力場変化の観測による海洋の熱・質量輸送に関する研究、全球的な水収支に関する研究、海水準変動に関する研究、氷床や氷河の進退に関する研究、大気質量変動に関する研究などが進展すると期待でき、今回のEGS総会でも「測地」のセッションでは、この関係の発表が多かった。

このほか、超伝導重力計のグローバル・ネットワーク観測データを用いて地球深部ダイナミクスを明らかにするGGP (Global Geodynamics Project) 計画のデータ流通が1997年から開始さ

れており、今回のEGS総会でも超伝導重力計に関する発表がいくつかあった。休憩時間にGGP関係者の間で話し合った結果、次回のEGS-AGU-EGU総会でGGP関連の研究成果を取りまとめる場を設定しようということになり、G.Jentzsch (ドイツ)、J. Hinderer (フランス)、D. Crossley (米国)、S. Takemoto (日本) の4名をConvenersとして、“Time Varying Gravimetry, GGP, and Vertical Crustal Motions”と題するセッションを設けることが決まった。

IAG執行委員会は、2001年4月26日と27日にノボテル・ニースセンター・ホテルの会議室で開催された。主な議題は、2001年ブダペストで開催されたIAG学術総会の際に提案されたIAG組織改革案の細部の検討と役員選挙規定の改定のほか、2003年IUGG/IAG札幌総会の日程についてであった。

IAG組織改革案は、現行の5分科 (Sections) を4つの委員会 (Commissions) に改組し、課題別委員会 (現行のCommissions) は、新しい委員会で再検討ののち、必要なものはSub-Commissionsとして残すというものである。2003年IUGG/IAG札幌総会の日程については、7月3日にIAGレセプション、7月9日にIAGディナーを開くことが決まった。筆者は会場設定を任された。

二一ス点描

関西空港を4月20日に出発し、その日のうちにパリに着き、ノートルダム寺院近くの小さなホテルに宿をとった。美術館に入る時間的余裕はなかったが、マロニエの白い花がきれいだった。

た。セーヌ河畔のレストランで鮭料理を頼んだら、匂いがきつくて閉口した。

翌日の21日にパリからニースに着いた。登録を済ませてから、海岸沿いの古いホテルのレストランで夕食をとり、夜10時半ごろ、宿泊中のホテルに戻る途中で、ちょっと恐い目にあった。

道路が海岸から離れるあたりの人通りが途絶えた場所で若い女性が地図を広げながら近寄ってきて、道を聞かれた。「私も旅行者ですから、わかりません」とワインの勢いで気楽に返事をしたら、背後から若い男が二人寄ってきて「ポリスだ。パスポートを見せろ」と言う。そういう連中がいると以前に聞いたことがあったので、「馬鹿モン！」と日本語で一喝し、睨みつけておいて、そのまま歩き出すと、それっきりもう追いかけてこなかった。ちょっと冷や汗をかいた。

ニースの食べ物では、旧市街の海鮮レストランで食べた牡蠣^{かき}と雲丹^{うに}とロブスターのうち、牡蠣が一番おいしかった。大きな殻にしっかり身がついていて、6個食べたら、それだけで満足だった。それに比べると、雲丹は日本で食べるものより身が少なく、いまひとつだった。

ニースに着いて4日目、滞在中のホテルの前にある駐車場にアッという間にサーカスのテントが立った。テントの周りを20台近くの専用トラックで囲み、その中のスペースに馬小屋も見える。古いハリウッド映画の場面を思い出した。ショウを見物したいと思ったが、残念ながら、その機会はなかった。

竹本 修三（たけもと しゅうぞう 1942年生）
日本学術会議測地学研究連絡委員会委員長、同地球物理学
研究連絡委員会委員、国際測地学協会第V委員会（地球潮汐委員会）委員長、京都大学大学院理学研究科教授
専門：固体地球物理学、測地学

日本学術協力財団の出版図書

「地球環境の危機と21世紀の私たち」

— 日本学術会議主催公開講演会における記録 —

A 5 版 135ページ 頒価 1,100円（〒 240円）